新編国歌大観

第八巻 私家集編Ⅳ

歌集

新編 国歌大観

第八巻 私家集編Ⅱ

歌集

角川書店

新編国歌大観 第八巻

私家集編Ⅳ　歌集

平成二年四月十日　初版発行
平成六年七月十日　再版発行
編　者　「新編国歌大観」編集委員会
発行者　角川歴彦
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三　郵便番号一〇二
振替東京三―一九五二〇八　電話　営業〇三―三八一七―八五二一　編集〇三―三三三一―五一〇
印刷・製本所　凸版印刷株式会社
© Printed in Japan ISBN4-04-020182-5 C3592
落丁・乱丁本はお取替えいたします

凡例

㈠『新編国歌大観』第八巻私家集編Ⅳ歌集部に収める各集は、原則として、広く一般に流布し、かつ歌数の多い系統の中から最善本を選んで、底本とした。なお本巻においては、持為・後崇光院・為広など、一人で別系統の複数の家集を持つ歌人の場合、その主要家集を二ないし三収めた。

㈡本文作成にあたっては、底本を尊重したが、利用の便をはかって、以下のような校訂を加えた。

①底本における和歌・連歌等の本文の偶然的な脱落・衍字・誤写などが他本によって修正しうる場合は校訂を行なった。

②底本の歌順が明らかに誤りと認められる場合は、他本によって訂正し、その旨を解題に記した。

③底本に存するミセケチなどは表示せず、原則として訂正結果に従った。また底本に存する記号・注記・校異の類は、作品成立時、もしくはそれに近い時期に加えられたと判断される場合にのみそのまま残し、他は原則として省略した。ただし、歌頭の合点の類は印刷の都合上、本文には残さず、所在状況を解題に記した。

④本文が孤本・稀本であるため他本によって校訂本文を作成しえぬ場合は、書写の誤りと見られる部分の右傍に（ママ）と注した。

⑤本文が判読しえぬ場合は字数分の□を用いることとし、長文で字数不明の場合は「　」によって表示した。

⑥本文に和歌・詞書等の脱落があり何行分かの空白がある箇所には、（空白）と表示し、また何字分かの空白がある場合は、その部分を〔　〕の記号により表示した。

㈢奥書・識語の類は、その集の撰者が自ら書いたと認められるもの以外は原則として省略した。ただし、撰者以外の奥書・識語は、必要に応じて解題に記した。

㈣各集ごとに、和歌・連歌・漢詩句の別なく、その歌頭（句頭）に通し番号を打った。ただし本文中に、改行等の形で独立表示されているものに限った。

㈤表記は底本のそれをできるだけ尊重したが、よみやすさへの配慮から、次のような処置をとった。

①いわゆる変体仮名は普通の平仮名に改めた。

②異体・別体の漢字は通行の字体に統一した。

③仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一した。ただし字音語のうち、物名歌など特別の場合は底本通りの表記とした。

④活用語などの漢字表記については、必要に応じて最少限の送り仮名を加えた。

⑤漢字表記の助詞・助動詞は原則として平仮名に改めた。その他

特異な宛字で平仮名に改めたものがある。

⑥反復記号は用いなかった。

⑦清濁は区別して示したが、清濁をこえた掛詞として用いられるものについては、原則として清音とした。

⑧和歌の難読字にはふり仮名をつけた。

⑨序・詞書・左注等には適宜読点を打った。

⑩底本の片仮名表記は平仮名に改めた。

⑪以上のほか、底本の形態にかかわらず、例えば和歌は一行書き、長歌は句ごとに一字あきとし、あるいは作者名を原則として一定の位置にそろえるなどの処置をとった。

㈥解題は、その集および底本に関する基本的な事実を述べたほか、重要な校訂箇所などを記すにとどめた。

㈦索引に関しては索引部凡例を参照されたい。

第八巻　私家集編Ⅳ　略称一覧

雅世集　1雅世
持為集Ⅰ　2持為Ⅰ
持為集Ⅱ　3持為Ⅱ
持為集Ⅲ　4持為Ⅲ
為富集(持為)　5為富
慕風愚吟集(堯孝)　6慕風
堯孝法印集　7堯孝
沙玉集Ⅰ(後崇光院)　8沙玉Ⅰ
沙玉集Ⅱ(後崇光院)　9沙玉Ⅱ
草根集(正徹)　10草根
心敬集　11心敬
慕景集異本　12慕景異
常縁集　13常縁
亜槐集(雅親)　14亜槐
続亜槐集(雅親)　15続亜槐
基佐集　16基佐
松下集(正広)　17松下
拾塵集(政弘)　18拾塵
蓮如上人集　19蓮如
下葉集(堯恵)　20下葉
宗祇集　21宗祇
孝範集　22孝範
卑懐集(基綱)　23卑懐
基綱集　24基綱
雅康集　25雅康
閑塵集(兼載)　26閑塵
碧玉集(政為)　27碧玉
柏玉集(後柏原院)　28柏玉
為広集Ⅰ　29為広Ⅰ
為広集Ⅱ　30為広Ⅱ
為広集Ⅲ　31為広Ⅲ
春夢草(肖柏)　32春夢
邦高親王御集　33邦高
雲玉集(馴窓)　34雲玉
雪玉集(実隆)　35雪玉
称名院集(公条)　36称名
春霞集(元就)　37春霞
桂林集(直朝)　38桂林
通勝集　39通勝
惺窩集　40惺窩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第八巻 私家集編Ⅳ 歌集目次

（歌集ページ）（解題ページ）

雅世集（島原松平文庫蔵本）……七　八一五
持為集Ⅰ（国立歴史民俗博物館蔵本）……二三　八一六
持為集Ⅱ（書陵部蔵一五〇・六三六）……二八　八一六
持為集Ⅲ（書陵部蔵一五〇・六三〇）……三三　八一六
為富集―持為―（国立歴史民俗博物館蔵本）……三四　八一六
慕風愚吟集―堯孝―（書陵部蔵五〇一・六九六）……四三　八一七
堯孝法印集（群書類従本）……五三　八一七
沙玉集Ⅰ―後崇光院―（書陵部蔵伏・八）……五八　八一八
沙玉集Ⅱ―後崇光院―（書陵部蔵五〇一・六四四）……六四　八一八
草根集―正徹―（ノートルダム清心女子大学蔵本）……八二　八二一
心敬集（島原松平文庫蔵本）……二五六　八二五
慕景集異本（静嘉堂文庫蔵本）……二六四　八二五
常縁集（書陵部蔵一五二・二一五）……二六六　八二六
亜槐集―雅親―（寛文十一年板本）……二七三　八二八
続亜槐集―雅親―（書陵部蔵五〇〇・一七二）……二九五　八二八
基佐集（島原松平文庫蔵本）……三〇七　八三一
松下集―正広―（国会図書館蔵本）……三一五　八三三
拾塵集―政弘―（祐徳中川文庫蔵本）……三八二　八三五
蓮如上人集（大谷大学粟津文庫蔵本）……四〇一　八三六
下葉集―堯恵―（書陵部蔵一五五・三八）……四〇三　八三七
宗祇集（天理図書館蔵本）……四一五　八三七
孝範集（九州大学附属図書館細川文庫蔵本）……四三一　八四〇
卑懐集―基綱―（宮城県図書館伊達文庫蔵本）……四三四　八四一
基綱集（国立歴史民俗博物館蔵本）……四三五　八四一
雅康集（大阪市大図書館森文庫蔵本）……四四〇　八四二
閑塵集―兼載―（書陵部蔵一五五・二六五）……四四七　八四三
碧玉集―政為―（寛文十二年板本）……四五四　八四四
柏玉集―後柏原院―（寛文九年板本）……四八〇　八四四
為広集Ⅰ（東京大学史料編纂所蔵本）……五三三　八四五
為広集Ⅱ（書陵部蔵五〇一・八二七）……五三六　八四五
為広集Ⅲ（書陵部蔵五〇一・七九二）……五三九　八四五
春夢草―肖柏―（寛政十二年板本）……五三二　八四六
邦高親王御集（続群書類従本）……五七〇　八四七
雲玉集―馴窓―（神宮文庫蔵本）……五七三　八四八

雪玉集—実隆—（寛文十年板本）……五九七　八五〇
称名院集—公条—（祐徳中川文庫蔵本）……七四一　八五二
春霞集—元就—（内閣文庫蔵本）……七七二　八五三
桂林集—直朝—（島原松平文庫蔵本）……七七五　八五四
通勝集（東洋文庫蔵本）……七七九　八五五
惺窩集（惺窩文集所収本）……八〇五　八五六
全十巻収載作品一覧　八五八

新編国歌大観　第八巻　私家集編Ⅳ　歌集

雅世集〔1雅世〕

初春霞

一朝日影匂ひそめぬる霞より春の色こそあらはれにけれ

早春霞

二さえのこる雲に雪間を先見せて霞すくなき春やきぬらむ

野子日

三姫小松ひきののつづらくりかへしつきせぬ千代の春ぞしらるる

夜梅

四軒端もる月もさながら雪の下にうづもれはてぬ梅がかぞする

春夕花

五のこりなくとけにけらしなさく花のひも夕ぐれの春の山かげ

戸外春嵐

六春わかみ霞もとぢぬ柴の戸は松のあらしや猶はらふらむ

春駒

七うつるさへ友とやいばふ春あさき野沢の水のかげぶちの駒

款冬

八吉野川よしや世の中いはぬ色に春咲く花は心あるらし

早苗

九おのづからせき入る水をむすぶ手にとるや早苗も涼しかるらん

沢若菜

一〇春さむき野沢の水に袖ぬれてむすぼほれたる若菜をぞつむ

古寺藤

一一山寺のしきみの落葉吹きかけて春風にほふ松のふぢなみ

鶯

一二梅が香にさきあふ比のはつ花を先袖ふれて折りやとらまし

春雪

一三天河春行く水のあはゆきやおちても袖にきえんとすらん

雨中花

一四咲く花の衣春雨ふりそひぬおほふかすみの袖のしづくに

山路雉

一五桜がり手にすゑずともはし鷹のと山のきぎすふみや立てまし

尋花

一六春をへて猶分けいらむ山桜わがことのはの花にあふまで

立春日

一七明けわたる天の岩戸を出でし日の光かはらで春やたつらむ

湖霞

一八さざ浪や八十の湊を行く船のほのかに見えてたつ霞かな

島残雪

一九白妙に磯こそ波はそれながらささ島見えて雪ぞのこれる

若菜多

（空白）

野径早蕨

二〇末野なる松の煙の下蕨もえ出づるかたをふみや分けまし

暁更春月

二一ほのかなる尾上の鐘の声ききて霞に遠き有明の月

帰雁成字

二二かへる雁立つやかすみのすみがれにつづかぬ鳥の跡を見すらし

落花随風

二三さのみなど風のまにまにちる花ぞしたふ心もさそひやはせぬ

松藤

二四いにしへのいつの子日に引きそへて松には藤のかかりそめけん

三月尽

二五大かたもくるるはつらき鐘の音を春の別に聞きぞわびぬる

見花

二六面影よ後いかにせん山ざくらめかれぬ花にけふもくらして

霞中花

二七芳野山分けつくしてもへだて行く花に霞のおくやのこらむ

麓花

二八しばし猶ふもとの真柴ふみならし峰にいそがぬ花のかげかな

杜花

二九心なき姿もしづのをののえを花になふれそみをのそま人

都花

三〇長閑なる花の都のやまざくらちるといふ事はよその春風

閑居花

三一花をとふ春の嵐にかくれ家の軒端の桜しづかにぞ見る

花浪

三二さく藤の色よりさきに越えてけり松風たかき花のしらなみ

花麻

三三神がきに立ちよる宜禰が袖かけて色そふ花のぬさの追かぜ

花便

三四今ぞしる花をたよりにとふ人のうつろひはてぬ春の心も

花漸稀

三五ちりまがふ花に青葉やそひぬらん遠ざかりゆく花のしら雲

紅梅

三六花も今西こそ秋と見し比の色にぞかへる軒の梅がえ

春駒

三七春といへば野べに心を引く駒をつなぐも草の糸かとぞ見る

江上春曙

三八浪の音に霞にとほき玉津島月の入江の春のあけぼの

苔上落花

三九山桜ちりしくままにこけむしろ花の吹くまで木木の下かぜ

柳露

四〇青柳の糸折りはへておく露に春吹く風もゆらく玉のを

春夜

四一いかがせむ心もしらぬながめゆゑ月と花とのあたら夜の春

春花

四二さくらちる青葉の梢分けすてて心とむべき山なしの花

鶴

四三大空にあがるひばりも心せよ霞のあみをはるのゆふぐれ

立春

四四行きつるる道ならなくにけふといへば春も我が身も年を越えぬる

むめのはな

四五軒ちかきにほひならずは梅のはな幾度袖に風を待たまし

湊帰雁

四六夕月夜かけの湊の入しほに波も霞もかへるかりがね

惜落花

四七我がかたにさそふと見ても山桜花にあらしをなほかこつかな

川上霞

四八春の色もうすきははその山かけて霞ぞわたるさほの河波

夕落花

四九山風の恨のみかはちるををしみくるるをしたふ花の木かげは

雨中待花

五〇いとはやも四方の木のめの春雨に青葉いそがで花ぞまたるる

春

五一山の端は雪と霞のむらぎえにいたりいたらぬ春や見ゆらむ

磯春草
五三 はる寒き波もたもとをこゆるぎのいそなつむべきひまやなからん
折梅花
五三 袖のかにくらぶの山の梅の花猶あかなくに折りやとらまし
松隔花
五四 ちらぬより嵐や花をやつすらむ尾上の桜松にへだてて
暮春雨
五五 散りのこる青葉の桜うちしをれ暮れゆく春の雨ぞさびしき
春雨
五六 さほ姫の袖のしづくをかけそへてかすみはてたる春雨のそら
霞
五七 大原の野べをこめてやあづさ弓をしほの山も霞たなびく
花
五八 雲と見る春のそらめや山桜おもひいれずと花やうらみむ
柳露
五九 青柳のみどりの糸をよるの露けさまで見せて春風ぞふく
庭上落花
六〇 吹きよする庭の春風そのままにかきねにかへる花と見えけり
南北梅花
六一 出づる日の光にむかふわが袖の左右にも梅が香ぞする
旅泊春雨
六二 今夜猶月もかすみのうら風にとまのひまもる春雨ぞふる
春曙
六三 月影は入りぬる後のそらもなほおぼろになりぬ春の明ぼの
款冬
六四 よしの河散りし桜も口なしの色にながるる山ぶきのはな
帰雁知春
六五 しら河の関をば越えぬかりがねも霞とともに立ちわかれけり
折花
六六 きつつ見ぬ人にかたらむことのはのおよばぬ花を手折りつるかな
早蕨
六七 山がつの妻木の道のさわらびや袖にをり入るたよりなるらむ
花
六八 春風はふけどもよわし青柳のかづらき山の花のさかりに
春
六九 花の香も四方のかすみのひまとめてそこはかとなく匂ふはる風
七〇 かこつぞよ春やむかしも今は身にさだかならぬをおぼろ月夜と
春水
七一 やがてはやとくる氷も清滝の水がきこえて春やきぬらむ
夕落花
七二 ちるもうし暮るるもつらし花さそふ嵐のつてのいりあひのかね
梅
七三 さそひくる風も匂ひの深き夜はさきそふ梅の花ぞしらるる
三月尽
七四 暮れはつる日数をしらでやよひ山よるは越えじと春やとまらむ
草漸青
七五 うらがれし面影見えてあさ霜のふる葉にまじる野べの若草
山春曙
七六 あづさ弓おして春とや寒き夜の明ぼのかすむ天のかみやま
款冬
七七 芳野川岩間の浪の打つけに心にうつるやまぶきのはな
沢若菜
七八 日影さす沢辺の水のうす氷心もとけてわかなつむらし
花半落
七九 庭の雪梢の雲もひとしきに何をみよと（ヤヤ）花のちるらむ
梅
八〇 おそくとき花にぞ見ゆるおなじ枝をわきてといひし梅の色かは
三月尽
八一 春の行く入逢の鐘を大かたに今日もくれぬと誰かきくらん
立春雲
八二 けさは又のこる雪げの雲ゐより日影をさむみ春やたつらむ
竹鶯
八三 呉竹のさ枝の雪の花ぞのに春風寒みうぐひすぞなく
余寒霜
八四 さくを待つ花のひもさへとけてねぬ春の霜夜の袖ぞさむけき
岸柳
八五 春風にきしうつ浪の花かづらかけてぞなびく青柳の糸
樵路早蕨
八六 妻木とるたよりにぞをる煙たちもゆるも見えぬ草の若ばを
旅宿春月
八七 故郷の月やあらぬとかすむなりわが身ひとつの夜のたびねに
野亭若菜
八八 春の野の雪間に見ゆる若草のいほりも今ぞあらはれにけり
遠花
八九 山たかみ雲と見るまでちかづきぬかすみはてつる花の梢を
雛菫菜
九〇 草の庵にくさの雛のつぼすみれ一夜ねずとも人のとへかし
かきつばた
九一 春深き汀の藤もむらさきの色に又さくかきつばたかな
雲雀
九二 霞みゆく春の日影の末野よりのどかにあがる夕ひばりかな
款冬散
九三 風吹けばうつろふ浪の玉までも花とちりかふきしの山ぶき
春月
九四 春かぜも枝をならさぬ夜半なれや月のかつらの影ぞのどけき
落花
九五 ちると見る梢の花の雪なればきえずは有りともかひやなからん
渡郭公
九六 なれも今やどりはあらじほととぎすさのわたりの夕ぐれのこゑ
刈菖蒲
九七 あやめ草よどのさはべにおふるねの長き日ぐらしかるや里の子
夏野
九八 名のみ猶あさはの野べの朝な朝なふかくもしげる夏の色かな
橋五月雨
九九 日をへてもおなじときはの橋柱くちじとおもふさみだれの比
草蛍
一〇〇 くちにけるこぞのふるねもあらはれて草のしげみにとぶ蛍かな
納涼忘夏
一〇一 山桜春におくれし木の下に夏をもしらぬ風のおとかな
夏夜
一〇二 風すさぶ庭のをざさのよなよなは秋まつ虫のこゑぞ数そふ
蛍
一〇三 夏ふかきうき草がくれゆく水のみさびもえてとぶ蛍かな
夏祓
一〇四 夏衣なでてもつきぬ石川やせみのを河にみそぎをぞする
岡新樹
一〇五 ます鏡むかひの岡の夏木だちちりにし花の面かげぞなき
廬橘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一〇六にほひきて袖とふ風のやだりさし花たち花ぞよはにしらるる
待郭公
一〇七聞きてこそ心もはれめほととぎすなくねををしむむら雨の空
河夏月
一〇八此比は明行く夜半もやす川ややなもる月の影ぞみじかき
遠夕立
一〇九夕立の雲路は遠きすずしさをやがて待ちとる軒の松かぜ
郭公
一一〇ほととぎすいまだ旅なる音をそへよころもあやめの草の枕に
一一一としをへてこぞのふるごゑかはらぬやむかしながらの山ほととぎす
一一二ほととぎすふり出でてなく五月雨の雲の林やねぐらなるらん
一一三さ月こぬ山時鳥やまにてもしのぶる比はいかがなくらん
五月雨晴
一一四雲はるる梢の蟬の声みちて日数になりぬ五月雨の空
夏海
一一五夏かりのあしやの沖による浪のみるめ涼しき浦風ぞふく
夏旅
一一六草枕末はるかなるむさし野にいとど夢ぢやみじか夜の比
五月雨
一一七さみだれはけふみかのはら程もなくにごれる水のいづみ川浪
一一八ゆく水のけぶりも雲も立ちまよひ河なみたかし五月雨の比
暁卯花
一一九有明の月にかかると見えぬべし卯花山のよこぐもの空
夏草
一二〇今は猶駒もすさめずかる人も夏野の草や茂りそふらん
隣蚊遣火
一二一中がきも霧の籬の面影にけぶりたちくるしづが蚊遣火
夏
一二二すずしさも流もともにまし水のしばし岩こす夕立の跡
一二三紅の色を光と夏の日もともにてりそふなでしこの花
水辺蛍
一二四ながれえぬ野沢の水の草がくれほたるばかりや行くと見ゆらむ
夏月涼
一二五夕立のはれゆく雲のうす衣月もたまらぬ影ぞすずしき
杜郭公
一二六さしもこそ忍の杜のほととぎすなどことのはにいでてなくらん

滝上蟬
一二七風わたる岩ねの木木に鳴く蟬の声も落ちそふ滝のしらなみ
夏祓
一二八ねにたつるせみのを川のみそぎしてうすき衣にかかる夕浪
夏暁月
一二九かぎりある夕付鳥のいく声もきかでぞ明くるみじか夜の月
野亭蛍火
一三〇草の庵にかけても見えぬ玉だれのこすの大野にとぶ蛍かな
夏雨
一三一山ざとのそとものひさぎ吹きしをり夕立さそふ風のすずしさ
庭五月雨
一三二雲深きみ山のささの庵ふりて猶うきふしや五月雨のころ
夕立
一三三なる神のひびきは四方にきこえてもただ一むらの夕立のそら
江蛍
一三四難波江や秋まつあしの末葉よりほのかに見えてとぶ蛍かな
湊夕立
一三五しらすげのみなと吹きこす浦風に笠もとりあへず夕立の空
泊水鶏
一三六夕しほのみつの泊の波の上をたたく水鶏の音はなにぞも
鵜川
一三七大井河いかだの棹をさしそへて又暮れいそぐうかひ船かな
一三八大井川まとものたなはくるるかと見れば明けぬる瀬瀬のかがり火
月前柞
一三九月に見る夜半の柞の其色や一時雨せし峰のうすぐも
閑山月
一四〇しづかなる光もたかし又たぐひなちのみ山の秋の夜の月
有明月
一四一空にのみ在明の月と見し程におぼえずはらふ袖の露かな
河月
一四二友よばふをちかた船の末こえて月にうかるる宇治のさと人
江月冷
一四三風ふかぬまのの小花に露見えて袖に入江の月ぞさむけき
月
一四四ひかりそふ月とは見えじさらしなの姨捨山も都ならねば
惜月

一四五深けすぎて又待つ人もまてしばし山のあなたにかかる月かげ
舟中月
一四六こぐ船のかいのしづくも見ゆるまで月にくまなき浪の上かな
竹間月
一四七呉竹の葉分の月に見えてけり木のめにまさる心づくしに
秋月
一四八秋をへて此みづがきの月よよし日吉のかげもてりやそふらむ
月
一四九さやかなる光を花と見るからに月もさかりのころぞしらるる
一五〇雲もなくなぎたるあさを又や見ん月に晴れゆくよはのけしきは
一五一さしのぼる光を今と見るよはやもろこしまでも山のはの月
既傾月
一五二中空にややかたぶきてゆく月の道をばかくせ夜半の浮雲
月照草花
一五三初尾花なびく末野の夕つゆに光をかはす袖の月かな
不知夜月
一五四雲のゐるたかねを出でていざよひの程より遅き月の影かな
在明月
一五五下葉ちる月のかつらの色見えて秋風吹きぬあり明のそら
月前露
一五六さく花の千種の露も数見えて秋は色色の月ぞやどれる
嶺月
一五七名にたかき月にぞ見ゆるをとこ山峰よりくだる神の光も
橋月
一五八今ははや夜わたる月も影ふけぬ秋風寒き竹河のはし
潟月
一五九いつか又都のつとにいはみがたしほひの月にあかぬながめを
水郷月
一六〇しほやかぬ浦半の月の影にさへけぶりぞのこる志賀の浜松
月前薄
一六一いつよりか物おもふ袖と成りぬらんを花が露に月のやどれる
月前鶉
一六二露ふかき床は草葉もすむ月にあらそひかねて鶉鳴くなり
月前席
一六三虫のねにきこゆるいたのあや莚露しく床の月ぞさむけき
江月冷

一六四風ふかぬまのの小花に露見えて袖に入江の月ぞさむけき
釣夫棹月
一六五すむ月の深けゆく浪はかへれどもさをさしかはし出づる釣舟
月前扁舟
一六六月に行くかいのしづくも秋の露玉江こぎ出づるあまのつり舟
残月越関
一六七逢坂や木の間の月の残る夜も関の戸くらき杉の下みち
待月
一六八いなば山まつとしきかば出でがての木の間の月も影やいそがむ
湖上月
一六九さざ浪やにほてる月の影たかみ雲こそなけれ興つ島山
江月
一七〇難波がた堀江の月の影ながら散るや玉もに秋風ぞふく
寄月往事
一七一面影のうかべる雲は跡なくてむかしの月ぞ空にのこれる
岡月
一七二かたをかに草かりつくす夕暮はいかなる露に月やどるらん
山家
一七三聞侘びぬわが身ひとつに山里の松ふくあらし荻のうは風
暮秋霜
一七四こむらさきたがもとゆひの霜ならん秋くれかかる菊のまがきは
浜菊
一七五吹上のをのの千種はうらがれてはまの真砂にたてる白菊
秋松
一七六今ぞ猶あらはれにける立田山紅葉の千しほ松のちとせも
秋尺教
一七七心の月の光を秋と見ぬ人や身をうき〔　〕のひまもとむらん
秋霜
一七八しばし猶かくてや見まし秋の霜のおくてのいなば色ふかき比
遠郷早秋
一七九たかさごの尾上の里の朝がたを松かげとほく秋は来にけり
七夕別
一八〇織女のおのがきぬぎぬかす人の袖さへけさやなみだなるらむ
紅葉
一八一大井河うつる紅葉のおなじ江にあらふ錦の色ぞわかれぬ
暮秋

一八二下葉ちる月のかつらぞ影さむき今はの秋の有明のそら
秋
一八三さびしとは思ひもいれじなべて今すみやすき世の秋の夕暮
一八四暁の雲にもあはじ秋の月待出づるより影ぞさやけき
七夕
一八五七夕のかざしの玉のひこぼしの光をかけず夜半ぞしらるる
稲妻
一八六小山田の賤がしわざはいなづまの光のまをもたのまざらめや
一八七村雨の雲吹きかくるあき風に猶きえやすきいなづまのかげ
萩映水
一八八萩の戸の下行く水ぞ色ふかき梅の紅葉もちりやそふらん
野径鶉
一八九かり人の分くる野もせの夕つゆはおのがなみだかうづらなくなり
荻風
一九〇吹く風にあひやどりする月ぞなき露のよそなる庭の荻はら
萩
一九一露霜のふる枝の萩の花かづらいく秋かけし色にか有るらん
刈萱乱風
一九二咲きまじる千種の花をかるかやの色に吹きみだす野べの秋かぜ
岡辺鹿
一九三紅葉するつつじの岡の夕暮は春なく鹿の声かとぞきく
嵐前紅葉
一九四あらし吹く峰の梢の紅葉葉やちらでも空にまづみだるらむ
河霧
一九五けさや猶川霧ふかく橋の小島のくまをあだに見すらむ
聞荻
一九六たぐひなきさびしさなれや風の音もただ一村の庭の荻はら
旅泊紅葉
一九七紅葉ちる磯山もとにうきねして秋の一夜や明のそほぶね
秋雨
一九八今よりの木木の心もいかならし秋風さむきむらさめのそら
田初秋
一九九秋のくる田のものほ浪風たちてせきいれし水や遠く行くらん
風前草花
二〇〇心なき風におほせて分くる野の千草の花は人もとがめじ
海路秋夕

二〇一いづくにかうきはなれてもなぐさまん夕さびしき秋のうら船
枕辺虫
二〇二夜や寒き老の涙の露をぬるみ手枕さして虫もなくなり
紅葉曝錦
二〇三朝な朝なたたむ錦と見えつるはかさなる山の紅葉なりけり
暮秋衣
二〇四長月もまださむからぬ所がら衣やなさぬ秋やくれゆく
葛風
二〇五波よりもかへるとぞ見る秋寒き吹あげのをのの葛のうら風
幽居荻
二〇六独すむ軒ばの松の下荻になほききわたる風のおとかは
露
二〇七初尾花なびく末のの夕露をはらひもあへぬ袖かとぞ見る
擣衣
二〇八誰か今遠里小野に住吉のまつ風ちかく衣うつらむ
野萩
二〇九秋はぎの花は草葉の名のみして木の下分くる宮城ののはら
九月尽
二一〇神無月春のとなりに成りにけり今日をかぎれる秋の日数は
虫声滋
二一一さく花の色の千草はくるるのに又さまざまのむしのこゑごゑ
紅葉映日
二一二夕日さす笠とり山の下紅葉時雨にぬれて色やそふらん
雛萩
二一三下葉ちるもとのまがきも薄ぎりの色こそなびけ秋萩の花
織促
二一四衣うつ末野の里の秋風にはたおる虫や声をそふらん
夜虫
二一五おのがねもいつまで草のきりぎりす霜夜の壁の庭になくなり
秋田
二一六ひらの海や湊田近き秋風にかりしほならぬ浪ぞよりくる
虫
二一七秋ふかき霜のよもぎが杣たてて松の名をかる虫やなくらん
二一八あれにける軒ばをとはばささがにの糸をたよりにすむとこたへん
荻
二一九しばし又末こす風の下荻にむすびもなれぬ露や見ゆらん

紅葉

二三〇 昨日見し夕紅のもみぢばや朝露かけて色をそふらん

二三一 影うつる夕日と見てや初瀬山紅葉にはやき入逢のかね
をみなへし

二三二 見ずもあらず見もせぬ霧のまがきより面影なびく女郎花かな
はじもみぢ

二三三 柞ちるかた山もとのはじ紅葉もろきたぐひと秋風ぞふく
つゆふかし

二三四 しなが鳥ゐなのふしはら露ふかしいづくに旅の床をさだめん
野鹿

二三五 露さむき小野の草ぶしうらがれて鹿の音遠き夜半の秋かぜ
秋風漬野

二三六 萩が枝の露ものこらじ秋風のふきと吹きぬる宮城野のはら
秋

二三七 さして身におもひもいれぬ夕だにとすればつらき秋のならひを

二三八 夕ぎりの猶たちのこす錦とははれまに見ゆる峰のもみぢば

二三九 山の端にほのみゆる月の影よりややかぜも秋の色をそふらん

二三〇 しばしだに風の隙なき荻のはに結ばぬ露や心おくらむ
野初風

二三一 住吉の松風かけて神の代もとほ里をのが秋は来にけり
七夕霧

二三二 七夕のかへさの浪ぢ立ちこめてかぢかくすらし天の川霧
七夕

二三三 ひこ星の衣たちぬふ織女やねがひのいとのくる夜まつらん

二三四 かぎりなる結びやおきしひこ星のねがひのいとのたえぬ契りを
田家秋夕

二三五 入日さす門田の秋の夕ざれはからぬいなばもほすかとぞみる
鹿声驚夢

二三六 秋寒き手枕の野に鳴く鹿やよその夢さへおどろかすらん
床間虫

二三七 秋もはや更行く床のきりぎりすよをさむしろの露に鳴くなり
湖上雁

二三八 かがみ山かずさへ見よと峰こえてひらの湊に雁は来にけり
遠紅葉

二三九 染めてけり遠山姫の袖の色もよそにまがはぬ峰の紅葉葉
暮秋木

二四〇 山風のよさむの霜もしらがしの色には見えぬ秋ぞくれゆく
暁虫

二四一 深けはつる木のまの月の有明に秋風さむき松むしのこゑ
杜紅葉

二四二 染めあへぬ千しほはまだき秋の色の夕露はらふ木がらしの杜
山家荻

二四三 のがれきて露のうき身をおく山にあらくな吹きそ荻の上かぜ
鹿隠霧

二四四 霧深きあだちの原に鳴く鹿の妻ごもれりとよそにしらるる
暮秋霜

二四五 立田姫わかれの袖におくものは暮れゆく秋の霜にぞありける
初秋荻

二四六 軒端なる荻のはかぜに音信れて露こそ見えね秋は来にけり
擣衣幽

二四七 たてぬきもよわき衣をうつ音やいとど嵐に遠ざかるらん
初秋雲

二四八 そのままにはや秋かけて涼しきや昨日の風の夕立の空
荻破夢

二四九 秋風に荻のはそよぐ手枕の夢見しほどや露もおくらん
浦秋夕

二五〇 塩木つむあこぎがうらのあまの袖くれもほしあへず秋の夕暮
霧隔帆

二五一 夕霧の上にかたほは猶見えてうはの空なるおきのとも船
雨後紅葉

二五二 めにかかるまさきのかづら色付きてと山はれゆく夕時雨かな
九月尽夕

二五三 猶のこる夜を長月となぐさめてわかるる秋のいりあひの声
草花

二五四 秋の草のたもともかへるかぜの跡にを花くず露みだるなり
紅葉出牆

二五五 夕暮の雛は山の下もみぢこず忘やよそにあらはなるらん
樵露

二五六 命とてたのまぬ虫やさむき夜の露をかなしむ声のきこゆる
朝時雨

二五七 外山よりあさ嵐おちてしばし又軒ばをめぐるむら時雨かな
冬池雪

二五八 たが老の影とか見まし氷りゐる池のかがみにふれる白雪
寒松

二五九 夕月ひさすとも見えぬ岡野べの松に氷れる霜の寒けさ
初冬時雨

二六〇 けふさらにふるや時雨の天地とわかれしよりの神無月かも
炭竈

二六一 小野山や炭やく雪は打ちけぶり春にしられぬ霞たなびく

二六二 年つもるなれもかしらの雪ふかみたへてすみやく小野の里人

二六三 里人の都にいでぬけふや又けぶり立ちそふ小野のすみがま
井氷

二六四 ちりつもる木のはもいくへ氷るらんあらしの末の山の井の水
神楽

二六五 こたふなり霜夜にさむき月弓のやや影ふくる本末のこゑ
竹雪深

二六六 呉竹のもとの雛もうづもれて又折れかへる夜半の雪かな
竹雪

二六七 うづもれぬさきにぞなびく山風の雪を吹敷く園のくれ竹
庭霜

二六八 庭の面の薄おしなみおく霜のつぎてふらばと雪ぞ待たるる
冬風

二六九 秋の色はのこる草木も嵐ふくと山あらはに冬は来にけり
冬草

二七〇 おきまどふ霜の花野の色ふりて人めも今やかれんとすらむ
雪

二七一 こしぢなるしるしのさをもなびくらし雛の竹の夜半の白雪

二七二 さえとほるねやの衾の薄き夜に重る雪の程ぞしらるる

二七三 ふもとなる峰も尾上もうづもれて今ぞ時しるふじの白雪

二七四 うづもるる煙とばかり見えつるや雪になびきしそのくれ竹

二七五 うづもるる梢をかけて白妙のはま松がえの雪のあけぼの
をののすみがま

二七六 風吹けば峰にわかるるけぶりさへ雪げになりぬ小野の炭竈
木枯

二七七 露霜はまだ染めはてぬ色をさへはや吹きつくす木枯のこゑ
社頭雪

二七八 年つもる名も老松の神なれば雪にや跡をたれはじめけん

二七九 としつもる雪のしらゆふかけそへてめぐみもふかし神がきの松

霰

二八〇 板間あらみねやにも玉を敷妙の衣手さむくあられふるなり

水郷寒蘆

二八一 難波江やかれはの蘆による波の風より先に霜はらふなり

冬

二八二 さえくれて峰の梢にゐる雲やふらでもつもる雪と見ゆらん

冬夕風

二八三 嵐ふくと山しぐれてゆく雲の雪げにかへる夕ぐれのそら

田家時雨

二八四 秋過ぐるいなばの雲はとだえしてかりほをさむみ時雨ふるなり

鶴払霜

二八五 さぞなげにはらひもあへぬ霜の鶴ねざめて聞けば声の寒けさ

寒月

二八六 折にあふ袖もかれのの色ふりて寒き霜夜の月ぞやどれる

湖千鳥

二八七 ふりにけるくにつみかみの浦千鳥遠きむかしの友やこふらむ

寒草所所

二八八 しばし猶ささが下はつれなくてむらむら見ゆる野べの霜がれ

雪中残雁

二八九 白妙の衣かりがねわたるなりふぶきにくもるゆきの山もと

寒草

二九〇 いとど今朝(けさ)もすさめじ大あらきの杜のあたりの霜の下草

嶺時雨

二九一 今も猶松はあをねが峰の雲木のはのあとに時雨れてぞ行く

落葉随風

二九二 さそひ行くおなじ木のはの時雨さへ山めぐりしてあらし吹くなり

江寒蘆

二九三 難波めがかりふく軒もおなじ色に入江の蘆ぞ霜がれにける

懸樋水

二九四 窓ちかき竹のかけひや氷るらし夜をへて水の音ぞ絶行く

山雪

二九五 降りきえてわかるる雲もうす雪の色に明けゆくよもの山のは

狩場風

二九六 あらし吹く木居の下草ふみならし帰るささむき御狩のの原

老後歳暮

二九七 老楽はこむといふとも門の松立つべき春を身にや急がん

暁千鳥

二九八 在明の月の出しほのうらかぜにほのぼの見えて行く千鳥かは

時雨

二九九 今朝は猶嵐のつてにゆく雲のまなくしぐるる音ぞきこゆる

三〇〇 雲さそふ嵐の末の一かたにおもひさだめずゆくしぐれかな

冬

三〇一 くもる日の光はきえてさえ暮るる嵐の伝に雪ぞちりかふ

霜

三〇二 八たびおく霜のしらゆふかけそへて神のいがきもなびく榊葉

寒蘆

三〇三 難波潟入江の浪のよるの霜に枯葉の蘆の音さやぐなり

千鳥

三〇四 月影も深けゆくよさの浦ちどりむれてぞわたる天のはしだて

三〇五 むろの木もねぐらかいかに夜をさむみなくやちどりのとものうら風

網代

三〇六 ひをのよる氷のせきもよなよなやもりあかすらん宇治の網代木

鷹狩

三〇七 のる駒もたなれの鷹を引きそへてはるかに出づる野べのかり人

三〇八 いくよりもあかぬとだちにはしたかのおぼえずくらす野べの狩人

歳暮

三〇九 代代へてもつひに老せぬ人やなほ年の暮れぬる時に見ゆらむ

枯野

三一〇 なるみがた浦風遠き夕ざれはしほもかれのの色ぞさむけき

時雨過

三一一 雲はやき嵐のつてのむら時雨過ぎてもおつる軒のたま水

雪朝望

三一二 月に見し面影よりも朝ぼらけ千里くまなき雪の山の端

井辺氷

三一三 引きすてしなるこのつなも氷のみ結ぶたな井の水のさむけさ

狩場霙

三一四 なら柴の末こす嵐さえくれてかりばの小野は霙ふるなり

門中雪

三一五 なほざりの程こそ人もまたれしか思ひたえよとつもる雪かな

絶恋

三一六 へだてゆく年のをだえの橋柱あはれはかけよ立ちもかへらん

三一七 つひにさてあはずは何を玉くしげふたみかはれる中に忍ばん

忍恋

三一八 我こそは忍ぶの山の山もりよしげきなげきの色を見せじと

三一九 いはばやと思ふ人にはうとき身の心の色をつつむくるしさ

三二〇 いかがせん思ひかへして恋衣いひ出でぬ袖におつるなみだを

忘恋

三二一 浪かへる袖のうらわのわすれ貝人のひろひしことぞくやしき

寄雲恋

三二二 行へなき乙女の姿うはの空に思ふもくるし雲のかよひぢ

寄鐘恋

三二三 ひとりのみねよとの鐘の声はして待つよひ過ぐるほどぞかなしき

寄海恋

三二四 しらせばやうきになるみのあま衣袖にみちたるしほせありとも

三二五 年月をつたのみるめよいたづらにかづくいせをのあまとだにしれ

急別恋

三二六 夜をこむるおぼつかなさにきえかへりまた心おく道しばのつゆ

寄蛛恋

三二七 槙の戸もしばしはえこそささがにの衣にかかるくれをたのみて

寄貝恋

三二八 われのみや忍ぶの浦のわすれ貝名におふ草の種ならねども

顕恋

三二九 下にこそ重ねしものを紅の八しほの衣いろに出でけり

三三〇 いかにせん真砂にうづむ松がねのかくれもはてぬ浪のさわぎを

偽恋

三三一 今は人かはりはてぬる偽に我がまことさへ末もとほらず

後朝恋

三三二 わきかねぬ別路けさの床のうへに夢もうつつも露もなみだも

おもかげに

三三三 形見とて人はのこさぬ面影にむかふちぎりぞ今ははかなき

うちもねず

三三四 ねたくこそ待ちあかしつれ打ちもねず夢より外に人やとふべき

寄枕恋

三三五 今はわが心もおかじよとともにふるき枕もとしは経ぬらむ

三三六 朝ねがみそのすぢとなきちぎりだに忘れぬものを人の手枕

寄緒恋

三三七 心のみ猶引くことの緒をよわみねにたてわぶる身とはしりきや

逢恋

三三八ながれての世にまでかけん相坂の関のを川の末のしら浪

恨恋

三三九あまのすむ里のしるべのもしほ草かきつくしてよ浪のたよりに

忍親昵恋

三四〇青き葉の色には見せじうきながらつらなる枝もはづかしの杜

祈不逢恋

三四一ねぎかへる神の心もとけじとやわが下紐のむすぼほるらん

被厭賤恋

三四二今よりはくるないとひそあはれ身のうきにたへたる賤のをだまき

恋

三四三日にそへてもろき涙に見えぬらししのぶにたへぬ心よわさも

三四四浅からず思ひ染めける色を見よ涙の袖の朽ちはつるまで

三四五思川逢瀬は絶えて淵に身をなげく涙やなほつもるらむ

寄風恋

三四六いつまでか嵐のかぜも聞きわびん身は相坂の山路へだてて

不見恋

三四七我ぞうきかづくいせをの海士人もみるめにこそは袖ぬらしけめ

寄雨恋

三四八さはりある人は軒端の雨もよにおつる涙の玉水ぞうき

非心離恋

三四九心のみたがへる鷹のそのままにそりはてぬべき中ぞくるしき

旧恋

三五〇結びてし契はとほきいにしへの野中の清水袖ぬらせとや

別恋

三五一待ちふけし夜半の恨も残るみにせめて別をいそがずもがな

夕恋

三五二後や人おもひあはせむとにかくにかはる夕けのうらみ有りとは

寄衣恋

三五三紅の一しほならぬさよごろも心ゆるさぬ我がなみだかな

三五四見せばやなうきみふる木のかは衣かはらぬ袖の露もなみだも

寄衣恋

三五五あさからぬ人のこころの花ごろもいつぬぎかへん色をみせまし

河水流清

三五六にごりなき代代の数かく水鳥の鴨の羽河は絶えじとぞ思ふ

志賀山越

三五七ちらば又あかでや人にわかれまし花にわけ入る志賀の山ごえ

鶴有遐齢

三五八むれてゐるたづのよはひもいく千世ぞ玉しきうつす庭の真砂に

隣家鶏

三五九老となる鳥もねざめをはじめとや里より里に告渡るらん

上陽人

三六〇つもり行く年もしるさでおとろふる其黒かみや雪となるらむ

山家風

三六一山ざとの松ふく風にのこりけりうき世を出でし袖の時雨は

松

三六二種しあればねざしとどめて石清水みづがき契る松ぞこだかき

河

三六三かちよりや先わたらましかま川末の浪路は海に出づとも

故郷

三六四名にしおはば昔ながらの山人も住むらんものをしがの故さと

浦舟

三六五神もひけなぎさの舟のつなで縄今玉ひろふ和歌の浦わに

末松山

三六六雪に見し面影かへて霞なる春のながめのすゑの松山

難波江

三六七難波がた入江の浪の夕立に蘆のはわたるかぜぞ涼しき

武蔵野

三六八むさし野の花の錦のいく千機千草もつきぬ色にみゆらむ

野島崎

三六九浪かへる野島が崎の秋風に尾花が袖ももしほくむなり

有乳山

三七〇あづさ弓矢田のをかけてもののふの有乳の山にみ雪ふるらし

浜名橋

三七一聞きわたる人の契りも遠つあふみ浜名の橋のかけたるやなぞ

松島

三七二涙せく身はあま衣松島やをしまぬ袖の何のこるらむ

鈴鹿河

三七三すずか山ふもとをめぐる河の瀬も八十氏人も往来たえせぬ

若浦

三七四あひに逢ひてねがひも塩もかなふ代に猶道ひろしわかのうら人

山家

三七五山ざとの竹のかけひをゆく水もうき世にかよふ道を忘れよ

樵路暮

三七六折りいるる賤の衣の妻木とや日も夕ぐれの道いそぐらん

田家

三七七引きかけし門田の水のながれさへ細きなるこの縄ぞのこれる

寄木雑

三七八をとこ山峰なる松をわが君の代代にさかゆくしるしとぞみる

鶴

三七九おもはじよ心のやみの夜のつるこはおろかなる道につけても

鏡

三八〇いく千代も君がひかりをますかがみ老せぬ影に猶ぞむかはん

弓

三八一九重や近きまもりもとる弓のやなみみだれぬ代にぞ仕ふる

朝湖水

三八二朝ぼらけ水の煙もかきくもりしほせにたるしがのうら波

天象

三八三天の川ゐせきにあまる水なれや雲に音して過ぐるむら雨

地儀

三八四神もげに袖ふる山のみづがきや久しき名をばかためおきけん

尋花

三八五花ゆゑにはるばるきてもかづらきや猶よそにのみ峰のしら雲

河五月雨

三八六さみだれに瀬瀬のみなわもまきながすにふの河浪音まさるなり

秋田

三八七しばし猶心ある賤や我が門のわさ田はからであかずもるらん

霧

三八八夕ぐれの山もまがきとなりにけり霧たちのぼる峰の遠かた

寒蘆

三八九霜おかぬ程だに浪にしをれ蘆の下葉朽ちゆく冬がれの比

炭竈

三九〇身をたつるしわざ有りとは見えてけり炭やく里の絶えぬ煙に

不逢恋

三九一思ひ河おもふ一瀬を越えやらでつらき身にだに迷ふくるしさ

久恋

三九二今ぞ猶つらき心はつくもがみちぎりしすぢも色かはるなり

山家

三九三 山里もなのみなりけりかくばかりすみよき世をば誰かいとはん
北野法楽 年月日同前 野梅
三九四 おのづから行きすぎがたし梅が香を袖にしめ野の春の夕暮
五月雨久
三九五 みなの河日数かさなる五月雨の雲やつもりて淵となりけん
荻風
三九六 つひにさて露見ぬ秋の草のはや風のひまなき庭の荻原
九月尽
三九七 ぬぎかへばあすより袖や又かさんけふゆく秋もおなじ時雨に
寒草霜
三九八 霜八たびおきてかれぬる花なれやその七草の面影もなし
寄岡恋
三九九 逢ふことはなぎさの岡の村すすき露けき袖もたれかとはまし
寄湊恋
四〇〇 夕塩のかるる契りもいたづらにうきは湊と浦かぜぞふく
暁ね覚
四〇一 かた敷の袖に有明の月影をね覚の友とまちいづるかな
寄世懐旧
四〇二 いにしへのかしこき人にしらせばやさかゆく君が御世のめぐみを
清滝法楽 年月日同前 梅の花
四〇三 昔へや今もかはらで梅の花にほふ難波のおきつはるかぜ
とこ夏
四〇四 灯にまがふさゆりの色もあれど猶てりまさる床夏の花
をみなへし
四〇五 なにかその露のちぎりを女郎花あだなる野辺にむすび捨てけん
ふぢばかま
四〇六 吹く風にはつるる草のいと見えてほころびやすきふぢばかまかな
はつ雪
四〇七 夕付日さすや岡辺に雲はれてはつ雪うすし松のむら立
おもかげに
四〇八 物ぞおもふあまた旅ねし面かげに面影そひて遠ざかる身は
うちもねず
四〇九 ちりのみやつもりはてましうちもねず打ちもはらはぬ中の小庭
あかつきは
四一〇 鐘のおとの聞えぬかたの暁は夕付鳥もこころしてなけ
おもふこと

四一一 物ごとにもれぬは君がめぐみぞと思ふことぶき神やうくらん
石清水社法楽 永享十一三十五 山霞
四一二 立ちわたる霞も霧と見えぬべし鳥羽田につづく秋の山かぜ
春駒
四一三 はつかなる野もせの草の青つづらさはらぬ比と駒いばふなり
夏月
四一四 いとど猶明けやすき夜の月見てぞ老と成りゆく程もしらるる
七夕
四一五 天つ空けふ逢ふほしの外に又いづれか秋のちぎり待つらん
秋霜
四一六 しばし猶からでや見まし秋の霜おくての稲葉霜ふかき比
時雨
四一七 麓より雲吹きかくる山風にしぐれぞのぼる夕暮の空
尋恋
四一八 たよりなきかたにもまよふ契かな人のこころの花をそふとて
田家
四一九 おのづから末葉折りかけ呉竹のふしみの小田にむすぶ庵かな
眺望
四二〇 めにかかる藤江の浦の浪の上にあそぶかもめも数やそふらん
住吉法楽 年月日同前 水郷柳
四二一 青柳の糸をもまきの島かけて影こそなびけうぢの川なみ
苔上落花
四二二 山風もちりしく花をはらふなりたが下ぶしの苔のむしろぞ
雨中時鳥
四二三 五月雨は過ぎがてにして時鳥空にとまらぬ夜半の声かな
遠郷早秋
四二四 高砂の尾上のさとの朝まだき松風とほく秋は来にけり
霧間船
四二五 さぞなげにとまの雫もしげからし霧より出づる沖の友船
初冬嵐
四二六 正木ちる外山の嵐袖かけてぬれぬ時雨に冬は来にけり
山家雪
四二七 うづもるる松のあらしはきかぬ日もさびしき山の雪の中かな
祈身恋
四二八 いたづらに心もひかぬ石神をたのみがたきやちぎりなるらん
樵路暮

四二九 帰るさや猶くれはてん柴人のくだるにはやき山路ならずや
玉津島法楽 年月日同前 近花
四三〇 あかず見る軒端の花の下ぶしにこの本さらぬ夢のかよひぢ
竹間花
四三一 呉竹の葉分の風に見えてけりまじる桜の花のそのふも
仙花
四三二 心ひく花にくらして春といへばそま山人もいとまあるらし
橋花
四三三 岩橋のよるさへ花と見えぬべし嶺にとだえぬかづらきの雲
島花
四三四 住吉の松ふく風にむかふらし花の浪そふあはぢしま山
隣花
四三五 中がきのかきねにかへる花の色やかた枝さしおほふ桜なるらん
花本
四三六 立ちよるもちぎりなりせば山桜此ひともとにはるやくらさん
花慰老
四三七 さらに今老の心ものびぬべしながき日かげを花にくらして
惜花
四三八 身にかへて惜むならひのなければや花はとまらぬ別なるらん
北野法楽 年月日廿六日 野春雨
四三九 かすみさへ立つみわこすげ色そひぬあさはの野べの春雨のそら
山葵
四四〇 葵草かへるみどりのかみ山もかはらぬ色に年は経にけり
五月雨
四四一 五月雨の雲の通路猶とぢていつかは月のすがたをも見ん
名所萩
四四二 たかまどの尾上の宮にさきしよりさぞなふる枝の秋萩の花
滝紅葉
四四三 今よりや山わけ衣いつそめん紅葉にまじる滝のしらいと
寒月
四四四 かたしきの衣手うすく成りにけり霜夜の月やさえまさるらん
深雪
四四五 かけそへぬ神のめぐみも浅からぬ此水がきの雪の白ゆふ
逢恋
四四六 限りありて逢ふ夜はこよひ悔しくも夢てふ物を何たのみけん
谷樵夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com